

東アジアにおける“中世的都城”

張学鋒

後漢時代に中国は古代社会から中世社会へと変化した。都の洛陽城内の宮殿は西漢の長安城より数が減少したとはいえ、依然として北宮・南宮・永安宮などの“多宮制”を維持していた。必要に応じて宮を設ける伝統を改め、単一の宮城の中に宮殿を集中させる都城プランは、東漢末期の曹魏鄴城に出現した。曹魏鄴城・魏晋洛陽城にはじまり、十六国鄴北城、東晋建康城、北魏洛陽城、東魏北齐鄴城を経て隋唐長安城にいたる“単一宮城制”は、歴代の主要都城のほとんど唯一の形式になったのである。こうした“中世都城”の平面形や空間構造は、主に次のような特徴をもつ。

- (一) 都城の全体をみると、都城の正門と宮城の正門を通る南北の軸線、および都城の東西城門を通る軸線は、宮城の正門前でT字形に交わり、都城の中心的な空間を形成している。
- (二) 異なる性質と機能をもって分散していた宮院は、南北軸線の北端に位置する宮城の中に集中し、“単一宮城制”を形成する。宮城の正門と主殿は都城の南北軸線上に位置している。
- (三) 宮城の防衛を強化するため、宮城の北部や傍らに禁苑を設け、住民の居住や市場の設置を禁止した。
- (四) 行政上の便宜のため、政府の主要な衙署や礼制建築は、すべて宮城の南に伸びる御道の両側に集中させ、都城空間における南北軸線の重要性を鮮明にした。
- (五) 住民の居住空間である里坊を宮城外の郭城内に統一的に配置した。北魏平城以降、治安のため里坊の四周に坊墻を築いた。それは以後の北魏洛陽と隋唐の東西二京に影響をおよぼした。

以上のような中国の“中世都城”プランは、中国史の“中世”に終始一貫している。それは閉鎖的な色彩が濃厚であり、都城内部の治安管理和人口の抑制を強化するところに主たる機能があった。

北方草原文化を受容して形成された隋唐長安城は、中国社会が東漢末年から分裂を迎えた後に再生した最後の“中世都城”である。江南に偏した東晋建康城、さらには中国の影響を受けて出現した日本の藤原京・平城京・平安京、あるいは新羅王京、渤海上京龍泉府などは、中国の“中世都城”が東アジア地区に波及したものである。このことからみれば、曹魏鄴城にはじまる“中世都城”は広く東アジア的な意義をもっているといえよう。